

## 神の言は肉となった

ヨハネ福音書1章14～18節  
2022年12月25日  
松田 基子 師

人類の歴史は愛をもって命と使命を与えて世に送り出してくださった、命の与え主である神様に聴き従うことを拒み、自己中心、人間中心の生き方を綴って(つづ)ってきました。自己中心の世界は、他者を踏み台にして自分の利益を求める世界です。人々は自分の欲求実現のために、

『あれを叶えてくれる神はいないか、  
これを叶えてくれる神はいないか』

と神々を求めました。それらは皆偶像であり、人間を生かす事の出来ない、

『滅びに向かわせるもの』

です。神様は御自身に叛き、自己中心に生きて、罪と悪を蔓延させる世界に、

『御自身こそ、人と世界を創造された創造主であり、人と世界を真に生かす真の神様である事を知らせよう』

と、なさいました。

その為に、御自身に聴き従ったアブラハムの子孫のイスラエル民族をお選びになりました。神様は御自身の御心を知らせるために、モーセを指導者に立てて、律法をお与えになりました。律法は神様を愛し、敬い、聞き従って、隣人と共に生かし合う信仰共同体を築いて行くためのルールです。しかし、イスラエルの民は、律法に人間的な解釈を加えて、律法で相手を計り、裁き遭う律法監視社会を作ってしまった。

御心から逸れてしまったのです。神様は、御自身の真の御心を知らせるために、神様の御子、イエス様を人の子として、この世に誕生させ、神様の御心を知らされました。イエス様は律法学者達の人間的な律法解釈で、律法監視社会から排除されている人々に、

『あなたも神様に愛されている。

尊い存在ですよ』

と、その事を示すために、彼らと食卓を共にするなど、彼らに親愛の情をしめして、近づき、神様の愛を語られました。

一方、イエス様は、神様の愛の御心を悟ろうとせず、自分の事は棚に上げ、モーセの座に座って人々を律法で計り、裁いていた律法学者を初め、追随して生きている人々を、厳しく非難されました。宗教指導者達にとって、

『イエス様は永い年月を掛けて築き上げて来た律法社会を揺るがし、破壊する危険人物』に思われました。彼らは結束して、イエス様を十字架に架けました。しかし、イエス様こそ、神様の御心を現された真のメシア・救い主であることは、十字架の死から、3日目に、神様が、イエス様を復活させられたことにより証明されました。

弟子達も、復活のイエス様に再会して

『イエス様こそ神の御子、真のメシア、救い主である』

ことが分かりました。同時にイエス様が、『如何なるお方であるかが、分かったのです。』

ヨハネ福音書の著者は、

『イエス様が如何なるお方であるか、それを世に知らせる事によって、一人でも多くの人が、イエス・キリストを信じて、永遠の命を得ること』を願いました。

ヨハネは、イエス様から世界の創造と、終末を読み取りました。ヨハネは福音書を記した目的を、20章31節に、

「これらのことが書かれたのは、

あなたがたが、

『イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである』

と記しています。ヨハネは当時、流布していた、ロゴス賛歌を用いてイエス・キリストが宇宙を超えた、人間には及びも付かない存在であることを

知らせました。

ロゴスとは、ことばと言う意味です。

1章の1節に、

**「初めに言があった。言は神と共にあった。  
言は神であった」**

と宣言しています。時間と空間の世界に置かれている私達は永遠の世界を知りません。永遠を支配しておられる神様が、有限の世界を創造された太初(たいしよ)、つまり、天地が開けた初めの時、そこに言がありました。

創世記1章3節に、

**「神は言われた。  
『光あれ』**

**こうして、光があった」**

とあります。言葉は神様の意思、御心の表れです。言葉を発するお方は、神様ですから、当然言葉は、神と共にあり、言葉は神様御自身であることは、私達にも納得できます。しかし、ヨハネがここで言いたいのは、

**『イエス様が、神の言であられる』**

と言う事なのです。その時、創造主である父なる神様と子なる神様は、別々の人格を持ちながら、神様の御心で一体となり、しかし、その働きは違っておられると言う事を、言いたいのです。その為に言を独立させて、

**「万物は言によって成った。成ったもので、  
言によらずに成ったものは何一つなかった」**  
と言っているのです。

神の御子は言の役目を担われました。神様が、御自身のご意志を発せられると、御子はその実体を出現させられたのです。ただ太初に於いては、御子も霊なるお方であり、私達の想像を超えています。4節に、

**「言の内に命があった。命は  
人間を照らす光であった」**

とあります。神の言の役目を担われた御子は、神であられ、永遠の命をもって居られました。永遠の命に生きておられる御子は、人間を愛し、人間を命に生かす光の源でした。神様の、

**「光あれ」**

に、光を出現させたお方です。人間は光がなければ生きていけません。命を輝かせる為に、光が必要です。

ところが創世記3章には、神様の言葉を疑わせる誘惑者が登場します。ここに神様が創造された美しい光の世界に、罪と悪を広げる暗闇の世界が入り込んで来たのです。どうすれば良いのでしょうか。9節を見ますと、

**「その光は、まことの光で、世に来て  
すべての人を照らすのである」**

とあります。神様は世界を罪と悪の暗闇から守る為に、光そのものである御子を人の世に送られました。御子は乙女マリアの胎にやどられクリスマスに人の子として、誕生されました。神様に選ばれたイスラエルの民の中に誕生されました。

しかし、人間的に判断した時、律法社会にとって、外見上、何の輝くところもない、大工の子として生まれられたイエス様は、社会に受け入れられませんでした。彼らは、受け入れないばかりか、十字架に架けて殺してしまいました。そのことは、暗闇であるこの世の勢力が勝ったかに見えました。しかし、イエス様が 神様のご意志、そのものの言である事の証明は、十字架の死から3日目に、神様が御子を復活させて証明なさいました。

イエス様は復活して、何をなさったのでしょうか。イエス様は霊の体に甦えられ、神様の権威執行者になられました。そして、12節に、

**「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」**

とあります。その名を信じるとは、

**『イエス様は神の御子であり、罪の赦しを与え、  
永遠の命を与えてくださる、真の救い主である事を信じ、自分の全存在を賭けることで  
す。』**

しかしその告白はイエス様を十字架に架けた社

会において迫害や命の危険が伴うことでした。ところが、弟子達は、復活のイエス様に出会って、イエス様が神の御子、永遠の命の与え主であることが確信出来て、危険は恐れではなくなったのです。イエス様は彼らに、神の子となる資格を与えて、神様の前に、これまでとは全く違う存在、神の子にしてくださいました。

13節に、

「この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである」

とあります。神の子となる資格には、この世の血筋や願望や、どんな策も通用しません。ただ、イエス様に全信頼する信仰だけです。神様はその一事で、新しい存在に生まれ変わらせてくださるのです。創造主にしか出来ない、創造主からの贈り物です。これらの賜物は皆、偏に、(ひとえに)イエス・キリストによるものです。そのことをご計画になったのは神様でした。神様は人間の命の与え主として、罪に滅びていく人類をお見捨てになることが出来ませんでした。神様のご意志、それはすべての人の救いです。神様はそのために、永い歴史を掛けて、人類を罪による、永遠の滅びから救う御計画をお立てになりました。そして、遂に、神様のご意志、言である、神の御子を人の世に、肉を纏う人の子として、人間の本質をその身に負った者として誕生させられたのです。

そのことをヨハネは14節で「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と言っています。

『宿られた』

と言うのは、一時の間、滞在されたと言う意味です。そこで大切なことは、イエス様は、人の子とされた事によって神の子としての神性が奪われたわけではありませんでした。では、その神性は何処に現れていたのでしょうか。ヨハネは、14節に、

「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと

真理とに満ちていた」

と言っています。神様の栄光、それは人間の輝かしさとは、全く違っていました。ヨハネ福音書13章31節で、イエス様は最後の晩餐を終えて、十字架の前に、

「ユダが出て行くと、イエスは言われた。

『今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった』

と言っておられます。イエス様の栄光は、神様の御心である人類の罪による永遠の滅びからの救いを成し遂げることによって、神様の真実が現される事だったのです。それは御子を信じる者にとって、恵みと真理に満ちていました。

恵みとは、神様からの一方的な愛です。ここでの真理は、愛なる神様の本質が顕わにされ、真実が明らかにされることです。人の世に無かったものを、イエス様がもたらせてくださいました。イエス様が神の子、真の救い主であることは、洗礼者ヨハネも証をしました。15節に、

「ヨハネは、この方について証をし、声を張り上げて言った。

『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』

とわたしが言ったのは、この方のことである」

とあります。ヨハネは、自分が神様からの啓示を受けている事を、1章29節以下で言っています。イエス様は自分が存在する前に存在しておられた、つまり、永遠の世界に居られた神の御子であると、証しています。

16節には、ヨハネの実感として、

「わたしたちは皆、この方の満ち溢れる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」

と言っています。神様に愛され、生かされ、守られているにも拘わらず、神様の御心を悟ろうともせず、自我を膨らませ、神様に叛いて、周りを苦しみ、滅びに向かう以外になかった人間のために、イエス様は神の子の位を捨てて、人の世

に、それも、人の最も低きに生まれ、人々に侮られ、罪を負わされ、身代わりとなって、十字架の嘲り(あざけり)と、肉体の苦しみに耐えてくださいました。それ程までして、得られた人類への救いの道を、イエス様は惜しげも無く、すべての人を招き、信じる者に、何の条件も付けることなく、無償でお与えになったのです。神の子の身分と永遠の命を、惜しげもなくお与えになりました。これ程の恵みが人類の歴史にあるのでしょうか。人類の歴史は、神の御子、イエス・キリストの十字架の贖いによって、驚くべき豊かさに変えられたのです。このイエス・キリストによる真の救いの豊かさは、決して途切れる事はありません。この恵みは汲めども、汲めども尽きません。

17節に、

「律法はモーセを通して与えられたが、  
恵みと真理はイエス・キリストを通して  
現れたからである」

とあります。イスラエルにとって、モーセは偉大であり、律法が与えられたことは、神様に選ばれた民である事の証しでした。それなのにイスラエル人は、選民意識にしがみついて、神様の御心を悟る事はしませんでした。律法は罪を教えるものであり、罪を知った者が、罪の贖い主であるイエス・キリストを求めるように、導く為のものであります。

ガラテヤの信徒への手紙、3章24節に、

「律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです」

とある通りです。そして、恵みと真理、つまり、神様の愛の本質は、イエス・キリストを通して現れたのです。18節に、

「いまだかつて、神を見た者はいない。  
父の(神の)ふところにいる独り子である  
神、この方が神を示されたのである」

と言っています。霊であられる神様は、その存在を人間に示し続けられました。しかし、あのモーセさえ、神様の輝きを受けただけでした。

神様は人類を愛されました。愛は具体的です。愛は聞くだけではなく、目でよく見て、手で触れて実感するものです。神様は人間を愛する故に、御自身の御心である言を、具体的に、目でよく見て、手で触れて実感出来るように、御自身のふところつまり、ご自身の心として共に居られる独り子に、肉を纏わせ、人の世に送られたのです。しかも、人類の罪を贖わせるためでした。

神様はこれ程の愛を、私達人類にお与えになったのです。イエス・キリストは、一途にこの神様の愛を現して御国に帰られました。クリスマス・・・それはこの神様の愛、イエス・キリストの愛を更に深く知り、神様の真実に応えて、イエス・キリストを信じ、真実を尽くす日です。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富み給う、天の父なる神様

あなた様の私達人類に対する、愛の深さは測り難く、驚くばかりです。

イエス様は神様御自身の言の実体として、クリスマスに、この世に生まれてくださいました。そして私達の罪を贖い、信じる者に神の子の身分と、永遠の命を与えて下さいました。

余りにも大きな恵みで、唯々御前に平伏すばかりです。どうか直すら(ひたすら)この御愛に応えて生きる者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの

お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。